抑うつ症状と家庭高血圧発症リスクの関連

時岡 紗由理
東北大学大学院　医学系研究科

【目的】抑うつ症状は心血管疾患のリスクであるが、抑うつ症状と高血圧の関連について一致した結果は得られていない。家庭血圧は診察室血圧と差があり、臨床上も重要視される。本研究は抑うつ症状が家庭高血圧発症のリスクとなるか検討を行った。

【方法】本研究は東北メディカル・メガバンク計画地域住民コホートを用いた前向きコホート研究で、ベースライン調査の時点で降圧治療を行っておらず、家庭血圧正常の者を対象とした。抑うつ症状ありはThe Center for Epidemiologic Studies Depression Scale 16点以上と定義し、ベースライン調査から約4年後に2回目の調査（詳細二次調査）を行い、降圧治療中の者または家庭血圧測定で高血圧の基準を満たす者を家庭高血圧発症と定義した。多変量ロジスティック回帰分析で、抑うつ症状と家庭高血圧発症との関連性を分析した。

【成績】対象者3,082人（平均年齢54歳、女性81%）のうち、抑うつ症状あり群は729人（24%）であった。家庭収縮期血圧は、ベースライン調査時点では抑うつ症状の有無で差はなく、詳細二次調査時点では抑うつ症状あり群で有意に高値であった（120.5 mmHg vs 119.2 mmHg）。抑うつ症状なし群と比較した抑うつ症状あり群の家庭高血圧発症のオッズ比は1.42（95％信頼区間:1.06–1.90）であった。

【結論】本研究は、抑うつ症状が家庭高血圧発症リスクとなることを示した。抑うつ症状への介入が家庭高血圧発症を予防する可能性が示唆された。